遺跡番号	遺跡名	読　み	所在地	種　別	現　状	内　容	所蔵者	文　献
213－11－011	鰐口	わにぐち	北秋田市坊沢字鰐口岱16－５	遺物包含地	畑地	続縄文土器(天王山式)	鷹巣農林高校	
213－11－012	相善	そうぜん	北秋田市坊沢字相善岱33－２	遺物包含地	畑地	縄文土器(中期、円筒上層ａ式)		
213－11－017	石の巻岱I	いしのまきたい	北秋田市脇神字石の巻60	遺物包含地	公園	縄文土器(晩期、大洞BC・C式)		
213－11－018	石の巻岱Ⅱ	いしのまきたい	北秋田市脇神字石の巻65	遺物包含地	公園	縄文土器(後期)、香炉型土器	鷹巣農林高校	
213－11－019	高森岱	たかもりたい	北秋田市脇神字高森岱16	遺物包含地	水田	縄文土器(前期～晩期)、大型遮光器土偶	鷹巣農林高校	『鷹巣町史　第一巻』1992
213－11－030	からむし岱Ⅰ	からむしたい	北秋田市脇神字からむし岱21	遺物包含地	道路・水田	縄文時代掘立柱建物跡、平安時代竪穴住居跡、掘立柱建物跡、中世火葬墓、近世掘立柱建物跡、縄文土器、続縄文土器、須恵器、土師器、陶磁器	秋田県埋蔵文化財センター	『からむし岱Ⅰ遺跡』県教委2002
213－11－031	からむし岱Ⅱ	からむしたい	北秋田市脇神字からむし岱93	遺物包含地	牧草地	続縄文土器、壷形土器	東京国立博物館	『秋田県史考古編』1960 『鷹巣町史　第一巻』1992
213－11－032	小ヶ田	おがた	北秋田市脇神字前谷地	埋没家屋	山林・水田	縄文土器(後期)、土師器		『秋田県史考古編』1960
213－11－033	観音堂岱	かんのんどうたい	北秋田市坊沢字観音堂岱６－23	集落跡	水田・畑地	石器、土器		
213－11－034	堀切石	ほりきりいし	北秋田市坊沢字大野尻堀切石６	遺物包含地	墓地	縄文土器(中期、円筒上層a・b式)		
213－11－037	川口	かわぐち	北秋田市脇神字からむし岱	遺物包蔵地	原野・畑地	縄文土器(後期)、石皿		
213－11－038	川口Ⅱ	かわぐち	北秋田市脇神字からむし岱	遺物包蔵地	山林・原野	縄文土器、石皿		
213－11－039	からむし岱Ⅲ	からむしたい	北秋田市脇神字からむし岱	集落跡	山林・原野	土坑、土器		
213－11－040	からむし岱Ⅳ	からむしたい	北秋田市脇神字からむし岱	集落跡	山林	竪穴住居跡、土坑、縄文土器		
213－11－041	からむし岱Ⅴ	からむしたい	北秋田市脇神字からむし岱	集落跡	山林	平安竪穴住居跡、縄文土器、土師器		
213－11－042	法泉坊沢Ⅰ	ほうせんぼうざわ	北秋田市脇神字法泉坊沢	集落跡	山林・原野	竪穴状遺構		
213－11－043	法泉坊沢Ⅱ	ほうせんぼうざわ	北秋田市脇神字法泉坊沢49外	生産遺構	山林	縄文時代竪穴住居跡、平安時代竪穴住居跡、鍛冶炉、板塀跡、土坑、柱穴、縄文土器、磨製石斧、土師器、須恵器、鉄製品、鉄滓、羽口	北秋田市教育委員会	『法泉坊沢Ⅱ遺跡』県教委　1998
213－11－044	湯車Ⅰ	ゆぐるま	北秋田市脇神字からむし岱	遺物包蔵地	畑地			
213－11－045	五右エ門屋敷下	ごうえもんやしきした	北秋田市脇神字五右衛門屋布下	集落	山林・原野			
213－11－046	大野台下	おおのだいした	北秋田市七日市字中屋敷大野岱下	包蔵地	山林			
213－11－047	湯車Ⅱ	ゆぐるま	北秋田市脇神字奥小ヶ田	遺物包含地	畑地			
213－11－055	小勝田館	おがたたて	北秋田市脇神字館野	館跡	山林・畑地			
213－11－056	脇神館	わきがみたて	北秋田市脇神字タタラノ沢31外	館跡	山林	ナイフ形石器、平安時代竪穴住居跡、空堀、土塁、炭窯跡、塚、縄文土器、石器、須恵器、土師器、陶磁器、銭貨、鉄製品、鉄滓	北秋田市教育委員会	『秋田県の中世城館』県教委1981、 『脇神館跡』県教委1999
213－11－062	槐岱道上館	さいかつたいみちうえだて	北秋田市脇神字槐岱道上	館跡	山林・畑地	空堀、郭		
213－11－076	観音堂岱Ⅱ	かんのんどうたい	北秋田市坊沢字観音堂岱	遺物包蔵地	山林		北秋田市教育委員会	
213－11－078	槻木岱	つきのきたい	北秋田市坊沢字槻木岱53	遺物包蔵地	水田	弥生土器(前期)	北秋田市教育委員会	『平成15年度町内遺跡分布調査報告書』鷹巣町教育委員会2003
213－13－001	大沢岱A	おおさわたい	北秋田市米内沢字大沢岱148－８	遺物包含地	畑地	縄文土器片(後期)、石器	(個人)	
213－13－002	大沢岱B	おおさわたい	北秋田市米内沢字大沢岱202－30	遺物包含地	畑地	縄文土器片(後期)、石器	(個人)	
213－16－002	金沢	かねざわ	北秋田市上杉字金沢226	遺物包含地	宅地	縄文土器片(後期)、石鏃	愛生園	

表１　周辺遺跡の内容

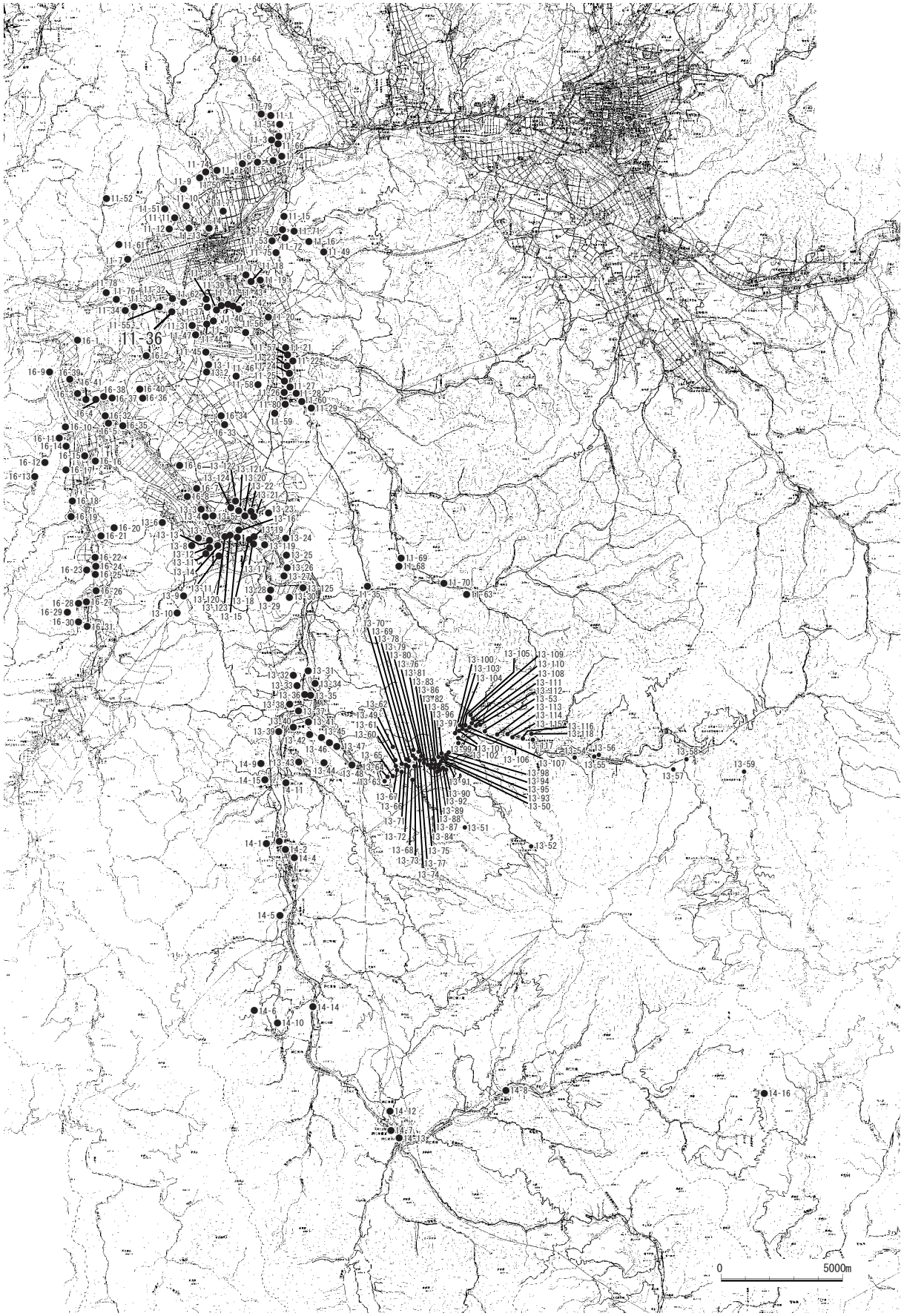

図５　遺跡の位置と周辺遺跡の分布

第３章　これまでの調査

本章は平成６年度から22年度までの発掘調査成果をまとめたものである。これまでの発掘調査総面積は16,950㎡を測る。

17年間の発掘調査から、４つの環状列石を中心とした遺跡の様相が明らかになっている。約20万㎡の遺跡範囲では、土地利用のあり方が大きく異なるので、地区別に各遺構の内容について報告することにした。

第１節　地区区分

第５・６次調査の報告をもとに、地区区分を行った（図６）。

エリア①・・・礫の搬入が認められる葬祭区域

礫の搬入が認められるという共通性により一つの区域として認定され、さらに三細分が可能である。

①－１・・・大規模な環状列石が構築される場

台地北部のごく接近した範囲に、直径30m以上の４つの環状列石と、それに伴なう掘立柱建物跡、貯蔵穴、捨て場（廃棄域）等の遺構が存在する。

①－２・・・配石遺構が構築される場

①－１から沢を挟んだ東側の台地先端には、小規模な配石遺構が数多く構築されている。そこから約80m南側では、第5次調査で小規模な集石遺構を検出している。配石遺構構築に用いられる礫の多寡は①－１より少ないが、同様の機能を有する場と考えている。

①－３・・・多量の礫が散在する場

①－２から沢を挟んだ最も東側では、礫が多量に出土する地区を確認している。第６次調査の礫散在箇所をはじめとし、エリア②との境に位置する沢まで続くようである。

全長100mを超える溝状遺構SD05を検出しており、区画された東側の範囲に土坑や焼土跡などの遺構が多く分布する傾向にある。

エリア②・・・礫の搬入が認められない葬祭地区

エリア①の南端にあたる沢を境とし、礫の出土が極端に少なくなる。この地区では単発的な埋設土器やフラスコ状土坑、土坑等が検出されており、礫を用いない墓が点在する可能性はあるが、密集した遺構分布は確認されていない。

エリア③・・・使用頻度の低い地区

他地区に比べ、遺構及び遺物の分布が希薄である。土坑、Tピット等が点在しており、使用頻度は低く、使用期間の一時期には、狩猟の場として機能していたことを窺わせる。

以上の地区区分に基づき、エリアごとに発掘調査成果を説明する。

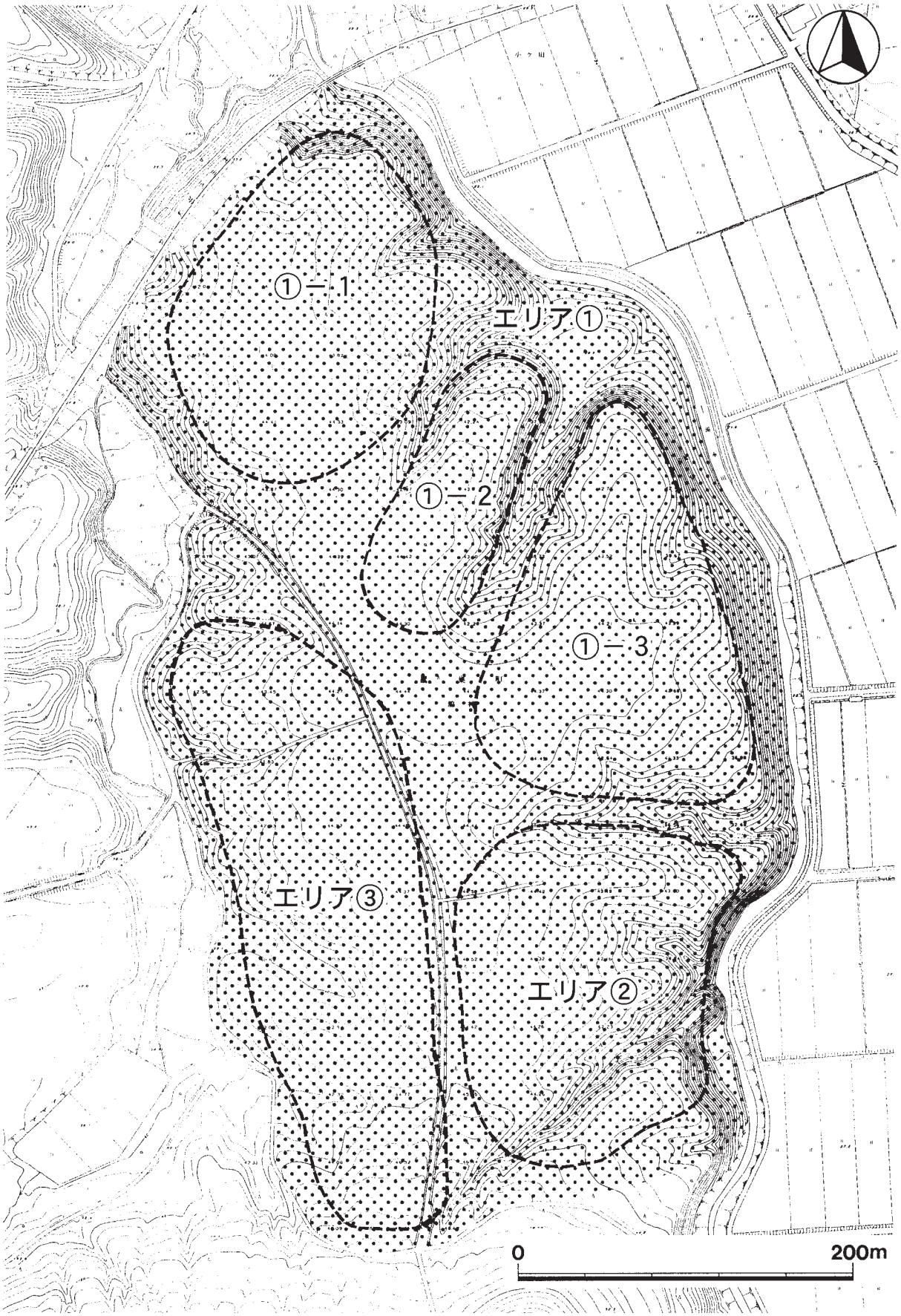

図６　地区区分図

第２節　基本層序

調査の円滑化を図るため、基本層序を設定した。層序はⅠ層～Ⅷ層に大別され、各層位の特性を示す(図 7)。

Ⅰ　層	黒褐色シルト	(10YR３／２)	表土。締まり、粘性ともに乏しい。植物根多量。
Ⅱ　層	黒褐色シルト	(10YR２／３)	硬く締まる。白色軽石粒少量。十和田A降下火山灰。
Ⅲａ層	黒色シルト	(10YR２／１)	締まり、粘性に富む。直径１㎜前後の白色軽石粒少量。
Ⅲｂ層	黒色シルト	(10YR２／１)	締まり、粘性に富む。白色軽石粒、微細なローム粒少量。
Ⅳ　層	黒褐色シルト	(10YR２／２)	締まり、粘性に富む。直径１～３㎜の地山粒中量。
Ⅴ　層	褐色シルト	(10YR４／４)	地山漸移層。硬く締まる。地山粒中量。
Ⅵ　層	明黄褐色ローム	(10YR６／８)	地山。白色軽石粒多量。鳥越火山灰層。
Ⅶａ層	明黄褐色ローム	(10YR６／６)	締まり、粘性に非常に富む。白色・黒色軽石粒微量。
Ⅶｂ層	灰白色ローム	(10YR８／１)	締まり、粘性に非常に富む。微細な白色軽石粒微量。
Ⅷａ層	鈍黄橙色ローム	(10YR７／２)	締まり、粘性に富む。微細な白色軽石粒多量。
Ⅷｂ層	灰白色ローム	(10YR７／１)	非常に硬く締まる。やや粘性に欠ける。白色軽石粒多量。

Ⅱ層は古代の遺物包含層、第Ⅲ・Ⅳ層は縄文時代の遺物包含層である。土の堆積が厚い地点のみ、Ⅱｂ層、Ⅲｂ層が認められる。

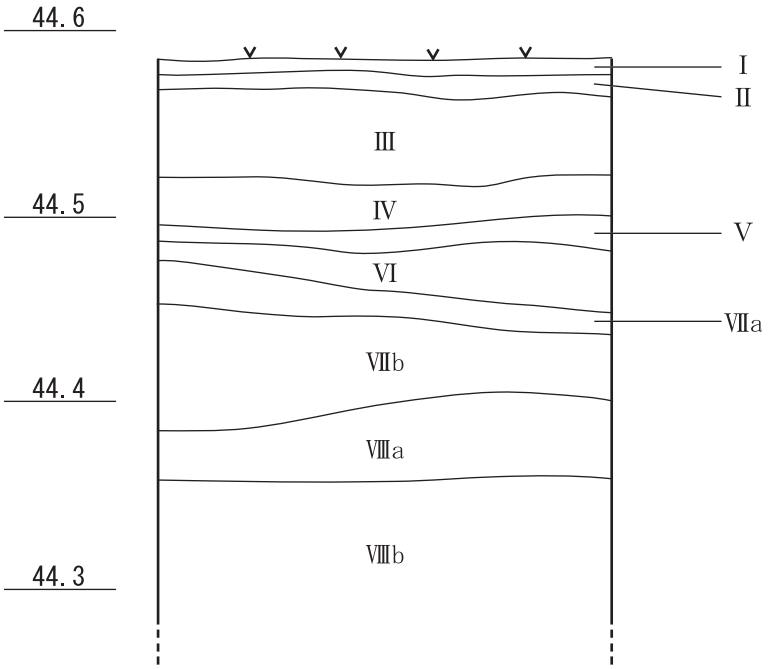

図７　基本層序

第３節　エリア①－１（環状列石地区）

この地区は遺跡の中の北西部分で、最も台地の北端部分にあたる。特徴は４つの環状列石が集中することである（図８）。環状列石のほかには、配石遺構、掘立柱建物跡、土坑、柱穴、道路状遺構、捨て場などが検出されている。

４つの環状列石はどれも直径30m以上を測る。それぞれの環状列石は大きさや形状が異なり、個性がある。その一方で、掘立柱建物跡を伴う共通性も認められる。

環状列石本体を説明する用語として、「内帯」と「外帯」がある。大湯環状列石国営調査で、内側の比較的小さい円環を内帯、外側の30m以上の円環を外帯と報告された（文化財保護委員会1953）。その後に大湯環状列石とは異なる三重の円環で構成される環状列石が確認された小牧野遺跡では、最も中心を「中心帯」、外側の30mの円環を内側から内帯・外帯と呼称している。さらに、もっとも発見の新しい鷲ノ木遺跡の環状列石は三重で、中心部分を「内帯」、外側を「外帯１」「外帯２」としている。

伊勢堂岱遺跡において、環状列石Ｃが発見された当初は小牧野遺跡と同様の呼び方をしていたが、二重の環状列石Ｄの発見で、４つの環状列石が一～三重と形状がそれぞれ異なる。このようなことから、本稿では列石中心に構築される10m以下の円環を内帯、外周の30m以上の円環を外帯として呼び、外帯が二重ないし三重に構成される場合、内側から外帯１、２と定義することにした。

環状列石を構成する小塊を「ブロック」として報告する。これは調査報告上の任意の単位である。

１．環状列石Ａ

グリッドNC74～NJ81の範囲で、４つの環状列石の中でもっとも北側に位置する（付図１）。

規模は長径30×短径27mで、形状は楕円形を呈し、さらに北側に二条一対の石列が張り出している。これは円環より４m離れた東側に弧状の組石列がつくられていることから、二重の外帯を意識して構築されたが完成せず、柄鏡形の形状に留まったと推測できる。

構成礫数は1,272個で、凝灰岩、流紋岩、安山岩、ひん岩を主体とする22種類で構成されている。ほとんどは河原石をそのまま利用しているが、中には一部分を打ち欠いたものや被熱を受けたものもある。ブロック12では石皿を構成礫として用いている例もみられる。

環状列石を構成する配石は様々な形状がみとめられる（図９）。中でも小牧野遺跡と同じ梯子状の配石は「小牧野式」と呼ばれている。小牧野式は、外帯１の北東部分（ブロック04）と、その対角にあたる南西部分（ブロック15・16）、そして外帯２の北西部分（ブロック24・25）の３ヶ所に認められる。その他特徴的な配石は、ブロック01で花弁状の組石が認められる。これはエリア①－２で発見されているSQ565に近似する。

環状列石Ａの内側では漸移層が確認できないことから、地山まで掘削され、地山粒や焼土粒が混入したⅣａ層が堆積している。これは盛土層と考えられ、Ⅳａ層に環状列石が構築される（秋田県教委1999）。このため列石は削平された際の傾斜部分に構築されるため、小牧野式石組の外帯１南西部分は列石内側に傾斜するように配置される（秋田県教委1999）。

大湯環状列石以来、環状列石は配石墓の集合体と考えられ、単位配石が下部土坑と一対一の関係にあるとされたが、環状列石Ａの発掘成果から対応関係にない。環状列石の周辺からは、配石遺構や掘

図８　エリア①－１遺構分布

立柱建物跡・埋設土器・道路状遺構・捨て場・土坑を検出している。

（1）配石遺構

環状列石Ａと伴うと考えられる配石遺構は、列石の南東側で１基検出した（図10）。SQ310は10個以上の礫を弧状（半円形）に配置した配石遺構である。規模は直径５ｍで、周囲にSKP24ｂ・685・755・968などの柱穴や、焼土遺構（SN1253）も検出していることから、掘立柱建物跡の可能性が高い。

（2）掘立柱建物跡

環状列石Ａの外周から７棟の掘立柱建物跡を検出している（図12・表２）。

最小のものは「SBけ」で長軸長3.2m・長辺長2.6m・短辺長2.2m、最大のものは「SBく」で長軸長4.7m・長辺長4.1m・短辺長4.0mを測る。「SBく・SBけ・SBこ」「SBは・SBひ・SBふ」が同じ地点で建て替えられ、重複している。

列石Ａの東側に位置する「SBも」は、６本のうち１本の柱穴が外帯２の直下に位置することからも、外側の列石構築以前に掘立柱建物跡が存在したことが窺える（秋田県教委1999）。

（3）埋設土器

環状列石Ａでは埋設土器が５基検出している（図10）。

SR02が外帯１上に位置する。正位に埋設され、用いられた土器は胴部に三角形区画と呼ばれる入組文を描いたもので、本遺跡で最も古い段階の土器と考えられる（図11）。

SR93・SR159が外帯２の延長線上に位置し、SR93は地文縄文上に幅広の沈線で文様を描いており、第Ⅲ群土器１類Ｃである（図11）。

（4）焼土遺構

環状列石の周囲では13基の焼土遺構を検出した（図10）。そのうち、環状列石内側で４基、外周で９基確認した。SN05のように大型不整形土坑墓のプラン内に検出されるものもあるが、ほどんどは単独の遺構である。

SN88は長軸0.5m、短軸0.4mで、やや硬くしまっており底面から土器片が出土している。掘立柱建物跡の中心に位置している。SN1252は規模が長軸1.0m、短軸0.7mで、配石遺構（SQ310）の中心に位置している。